

軽度難聴者が抱える困難に関する健聴者の認識¹⁾

—健聴者の経験及び視点取得に注目して—

名畑 康之*・名畑理津子**・栗田 季佳***・勝谷 紀子****

Hearing people's understanding of difficulties faced by people with mild hearing loss

—Hearing people's experiences and perspective-taking—

Yasuyuki NABATA, Ritsuko NABATA, Tokika KURITA and Noriko KATSUYA

要 旨

本研究では、軽度難聴者が抱える困難に関する健聴者の認識を調べるため、健聴者に対して、音声コミュニケーションを行う軽度難聴者を想定した音声を提示し、その軽度難聴者が日常生活の中でどの程度困難を抱えていると思うかを尋ねた。また、こうした健聴者の認識が、健聴者の難聴・難聴者に関する学習経験、難聴者との接触経験、相手の立場に立って考えようとする姿勢（視点取得）と関係するかどうかを検討した。本研究の結果、健聴者の多くが、音声コミュニケーションを行う軽度難聴者は困難を抱えていないと認識することが示された。さらに、学習経験がない者、視点取得が低い者は、そうでない者よりも軽度難聴者が困難を抱えていないと考える傾向が強かった。本研究により、軽度難聴者が抱える困難を健聴者が見過ごすということを示唆する実証的な知見が得られたことに加えて、こうした健聴者の認識に関与する要因として学習経験と視点取得が明らかになった。

キーワード：軽度難聴者、困難度、学習経験、接触経験、視点取得

1. 問題と目的

我が国には、難聴者と呼ばれる、聞こえにくさを持つ者が多数存在している。難聴者の中でも、難聴の程度が重く、身体障害者手帳の取得対象となる高度・重度の難聴者は、厚生労働省が実施した調査によって24万2200人程度存在することが報告されている（厚生労働省, 2013）。その一方で、日本補聴器工業会が実施した調査では、難聴の程度が相対的に軽く、身体障害者手帳の取得対象にならないことのある軽度・中等度の難聴者を含めると、難聴者の総人口は1430万人程度であると推定されている（一般社団法人日本補聴器工業会, 2016）。すなわち、難聴者の裾野は広く、一般的に難聴者と呼ばれる者では軽度・中等度の難聴者が圧倒的多数を占めているといえる。

難聴者は聞こえにくさに端を発する様々な困難を抱えているが、こうした困難は、難聴の程度の重い高度・重度の難聴者だけでなく、軽度・中等度の難聴者でも経験されることが知られている（勝谷, 2014; 鈴木・原・岡本, 2002）。勝谷（2014）では、その一例として、声の小さな人や早口の話が聞き取りにくかったり、電車やバスなど乗り物内の放送が聞き取りにくかったり、受付、窓口、レジでの会話が

*札幌市立星置東小学校

**北海道大学大学院文学研究科

***三重大学教育学部

****青山学院大学社会情報学部附置社会情報学研究センター

聞き取りにくかったり、などの日常生活上の困難を経験していることが挙げられている。また、鈴木ら（2002）では、補聴器を装着していない軽度難聴者が、人混みの中や小声で話しかけられた時などで、聞こえにくさを感じる事が報告されている。

軽度・中等度の難聴者の中には、上述した聞こえに関する困難だけでなく、その困難が健聴者から見過ごされるという問題も抱えることがある。これは、難聴の当事者でもあった山口（2003）によって指摘されている。彼は、「会話がそれぐらいできるのなら、日常生活ではそれほど困っていないでしょう？」のように、健聴者は難聴者が困難を抱えていないかのように見なすことがあると述べている。そして、健聴者がこうした発言をする理由として、当該の難聴者が、コミュニケーションを行う際に、手話や筆談などではなく、健聴者と同様の、音声を用いることが関係しているのではないかと考えられている（山口，2003）。健聴者にとって、音声コミュニケーションを用いるか否かが、難聴者の困難度を査定する重要な指標となり得ることは、勝谷（2011）の調査からも示唆される。彼女は、健聴者に「難聴は」に続く文章を自由記述させることで、難聴の程度に限定されない難聴の一般的なイメージを明らかにした。この調査によって、健聴者は、難聴者が困難を抱えているというイメージを持つこと、そして、この困難が「会話が分からない」「会話ができない」といった音声コミュニケーションに関する内容から構成されることが示された。すなわち、健聴者は、一般的に難聴者は音声コミュニケーションができず、そのことが難聴者の困難であると認識しやすいと推測される。

このような健聴者の難聴者に対するイメージに反して、実際の軽度・中等度難聴者では、聞こえに関する困難を抱えながらも、音声コミュニケーションを用いる者も多い。特に、軽度難聴者の中には、静かな場所などでの二者間の会話であれば、障害の存在が気づかれぬほどに、円滑に音声コミュニケーションができる者もいる（梶山・河崎，2008）。さらに、軽度難聴者の中には、健聴者と同じくらい発音が明瞭な者もいることが報告されている（安野・芝野・井村・伊藤，1965）。健聴者にとって、こうした円滑な音声コミュニケーションを行う軽度難聴者は、自身が持つ難聴者のイメージに合致しづらいと考えられる。したがって、一部の軽度難聴者では、常にではないものの円滑な音声コミュニケーションが可能であるために、実際に抱える困難が健聴者から見過ごされてしまうのかもしれない。こうした健聴者による誤った認識は、軽度難聴者に対する無理解な言動につながる恐れがある。その一例として、軽度難聴者が健聴者に対して難聴であることを開示しても、「本当は聞こえているのではないか」などと誤解を受けたりすることが挙げられる。そして、健聴者の無理解な言動によって、彼らの精神的健康が低下する可能性は、十分に予見されるものと思われる。したがって、健聴者による軽度難聴者が抱える困難の見過ごしは、難聴の程度が相対的に重い難聴者が抱えやすい、障害に対する差別や偏見、障害者レッテルといった問題と同様に重要な問題であると考えられる。

それでは、健聴者が、一見したところ円滑な音声コミュニケーションが可能な軽度難聴者が抱える困難を見過ごさないようにするためには何が必要だろうか。この問いを考えるにあたり、要約筆記者を対象とした山口（2007）の研究が参考になると思われる。要約筆記者は、要約筆記者養成カリキュラムを受講し、聴覚障害、聴覚障害者とりわけ中途失聴・難聴者の生活及び関連する福祉制度等について学習していることから、難聴・難聴者についての理解が深いと考えられる。山口（2007）では、現役の要約筆記者が、難聴者と関わるようになってから気づいたこと、分かったことについての自由記述が求められた。その結果、要約筆記者は、難聴者が抱える困難として、音声コミュニケーション以外の困難についても言及していた（例：危険にさらされたりすること）。この結果は、要約筆記者が、難聴・難聴者について学習した経験、難聴者と接触した経験を積み重ねてきたことによってもたらされたのではないかと考えられる。

また、山口（2007）は、要約筆記者の記述内容から、要約筆記者が難聴者の立場に立って感じたり理

解したりする姿勢を持つことを指摘している。すなわち、要約筆記者は、難聴者の立場に立って考えることによって、一般の健聴者が見過ごす難聴者の困難にも気づくことができたのかもしれない。したがって、健聴者が、難聴の程度が相対的に軽い難聴者が抱える様々な困難を見過ごすさないようにするためには、難聴・難聴者に関する学習経験、難聴者との接触経験、相手の立場に立って考えようとする姿勢、すなわち、Davis (1983) が考える共感の一側面である視点取得を持つことが必要なのではないかと予想される。

以上より、本研究では以下の2点を検討することとした。1点目として、健聴者は、特定の人物が軽度難聴者であると知っていたとしても、その軽度難聴者が健聴者と同じように円滑な音声コミュニケーションを行っている場面に遭遇すると、その軽度難聴者が抱える日常生活上の困難を見過ごしてしまう可能性があるのかどうかを検証した。軽度難聴者の中には、言語発達に遅れが見られる者もいる(杉内・佐藤・浅野・杉尾・寺島・洲崎, 2001)が、本研究では、軽度難聴者による円滑な音声コミュニケーションが健聴者の認識に与える影響を確実に把握するため、軽度難聴者の中でも、言語発達に遅れがなく、健聴者と区別がつかないほど円滑な音声コミュニケーションが可能である者に限定して、その軽度難聴者が抱える困難に関する健聴者の認識を調べた。

2点目は、こうした困難に関する健聴者の認識が、健聴者の難聴・難聴者に関する学習経験、難聴者との接触経験、共感性の一側面である視点取得と関係するのかどうかを検討した。また、これらの要因と困難に対する認識の関係性の内実を明らかにするため、健聴者には、軽度難聴者の困難として思い浮かべられる内容を自由記述するように求めた。例えば、困難に対する認識に、難聴・難聴者に関する学習経験が関係するのであれば、学習経験がある人とない人の間で、困難として思い浮かべられる具体的内容に違いがあるかもしれない。両者の違いを特定することで、健聴者が軽度難聴者の理解をより深めるための何らかの示唆が得られると期待された。したがって、自由記述に関する分析は、困難に対する認識と関係が示された要因についてのみ実施した。なお、一般に、視点取得は、共感の個人差を多角的に捉えるための質問紙、IRI (Interpersonal Reactive Index: 対人的反応性指標) (Davis, 1983) によって測定され、この下位因子の一つとして捉えられている。日本での研究では、IRIの日本語版である多次元共感性尺度(桜井, 1988)が一般的に使用されている(e.g., 久原・宮寺・藤原・小林, 2016; 中島, 2013; 田村・杉浦, 2017)。本研究でも、この尺度を用い、健聴者が相手の立場に立って考えようとする姿勢、すなわち視点取得を測定した。

2. 方法

2. 1. 参加者

健聴者(大学生)40名(男性20名、女性20名、平均年齢19.68歳、 $SD=1.31$)が参加した。

2. 2. 音声刺激

軽度難聴者と健聴者の会話を想定した音声刺激を用いた。本研究では、軽度難聴者の中でも、健聴者と区別がつかないほど円滑にコミュニケーションを行うことができる者に焦点を当てるため、実際の軽度難聴者ではなく、参加者ではない健聴者である研究協力者2名(男性1名、女性1名)の滑らかな会話を雑音のない環境下において録音して、これを軽度難聴者と健聴者による会話として参加者に提示した。先述の通り、軽度難聴者は、条件付きではあるものの、円滑な音声コミュニケーション(梶山・河崎, 2008)、明瞭な発音(安野ら, 1965)が可能であることから、本方法の妥当性は担保されるものと思われる。なお、実際の軽度難聴者に協力を依頼することで、音声刺激から個人が特定され、その人物が軽度難聴者であると、協力者が意図しない形で知られてしまう可能性があり、これを避ける必要があっ

た。会話の内容は、第一著者が作成したものであり、友人同士の Aさんと Bさんが本や映画について話をするというものであった (Appendix1)。音声刺激には、Aさん役を研究協力者の男性、Bさん役を研究協力者の女性が担当するバージョンとその逆バージョン (Aさん役を女性、Bさん役を男性) があった。性別による影響を統制するため、参加者には同性の人物が軽度難聴者であると教示した。すなわち、参加者が男性の場合、前者のバージョンでは Aさんが難聴者、後者のバージョンでは Bさんが難聴者であった。音声刺激は 25 秒であった。

2. 3. 質問紙

軽度難聴者が抱える困難に関する質問、多次元共感性尺度、社会的望ましき尺度、難聴者との接触経験を尋ねる質問、難聴・難聴者に関する学習経験を尋ねる質問から構成された。

2. 3. 1. **軽度難聴者が抱える困難に関する質問** 音声刺激の軽度難聴者が抱える困難に関する参加者の認識を調べるため、音声刺激の軽度難聴者が日常生活においてどの程度困難を抱えていると思うかを尋ねた (以下、困難度と呼ぶ)。回答は「1: 全くない」から「4: 非常にある」までの 4 件法で求めた。また、困難度を判断する際に、軽度難聴者が抱える困難としてどのようなことを思い浮かべたのかについて自由記述を求めた。

2. 3. 2. **多次元共感性尺度** 参加者の視点取得を測定するため、多次元共感性尺度 (桜井, 1988) を使用した。この尺度は、Davis (1983) が作成した IRI の日本語版である。質問項目は全 28 項目であり、回答は 4 件法で求めた。分析には下位尺度の一つである視点取得尺度 (7 項目) のみ使用した。項目には「友だちを良く理解するために、彼らの立場になって考えようとする」「他の人たちの立場に立って、物事を考えることは困難である (逆転項目)」などが含まれていた。

2. 3. 3. **社会的望ましき尺度** 参加者の回答が社会的に望ましい方向に歪められる可能性を排除するため、社会的に望ましい反応をする傾向が高い者を分析から除外することとした。一般に、社会的望ましき反応を測定する尺度として、SDS (Social Desirability Scale) (Crowne & Marlow, 1960) が使用される。本研究では、SDS の日本語版である社会的望ましき尺度の短縮版 (北村・鈴木, 1986) を使用した。質問項目は全 10 項目であり、「はい」「いいえ」の 2 件法で回答を求めた。

2. 3. 4. **難聴者との接触経験を尋ねる質問** 難聴者に接した経験があるかどうかを尋ねた。回答は「はい」「いいえ」の 2 件法で求めた。

2. 3. 5. **難聴・難聴者に関する学習経験を尋ねる質問** 難聴・難聴者について学習した経験があるかどうかを尋ねた。回答は「はい」「いいえ」の 2 件法で求めた。

2. 4. 手続き

調査は個別に行った。まず、第一著者が参加者に対して調査の目的、調査上のリスクや個人情報の取り扱いなどについて説明した上で、調査に参加することへの同意を求めた。

次に、参加者には、「これから、健聴者と難聴者の日常会話を聞いていただきます。ふたりは同じ大学に通う友人同士 (男性と女性) です。あなたと同性の人物が難聴者で、異性の人物が健聴者です。難聴者は、軽度の難聴 (声が小さいと聞き取れないことが多い) で、補聴器を着用していません。会話は 25 秒程度で、一度だけ流れます。あとで、この会話に登場する難聴者について質問をしますので、聞き逃さないよう、よく聞いて下さい」と紙面及び口頭で説明を行い、音声刺激 (軽度難聴者と健聴者の会話) をスピーカー (JVC 製 NC-SP1) で流した。提示する会話のバージョンは参加者間でカウンターバランスをとった。

続いて、参加者には、軽度難聴者が抱える困難に関する質問、多次元共感性尺度、社会的望ましき尺度、難聴者との接触経験を尋ねる質問、難聴・難聴者に関する学習経験を尋ねる質問の順に回答するよう紙面上で指示した。質問紙への回答に制限時間は設けなかった。

2. 5. 分析方法

参加者が選択した困難度に差が見られるのかどうかを調べるため χ^2 検定を行った（多重比較にはライオン法を用いた）。学習経験、接触経験、視点取得の関係を調べるため相関分析を行った（学習経験と接触経験は、どちらもありを 1、なしを 0 のダミーデータに変換した）。さらに、学習経験の有無、接触経験の有無、視点取得の高低（得点が中央値よりも高いか低いかで分類した）によって困難度に差が見られるのかどうかを調べるため t 検定を行った。以上の分析には SPSS (ver.22) を使用し、有意水準は 5% とした。

また、健聴者が考える困難度に関係があることが示された要因について、困難度と要因の関係性を明らかにするため、軽度難聴者の困難に関する自由記述をテキストデータとして、計量テキスト分析を行った。まず、誤字や脱字の修正を行い、茶釜（松本, 2000）を用いて形態素解析を行った。次に、KH Coder（樋口, 2004）を用いて共起ネットワーク分析を行った。

共起ネットワーク分析では、テキストデータの中で同時に出現する語、すなわち共起する語を線で結んだ図が示される。本研究では、困難度に関係があることが示された要因の共起ネットワークを作成し、各群、両群に共通する語を図示した。また、図示される語が 60 語以内となるよう出現頻度が 3 以上の語、かつ Jaccard 係数は 0.15 以上とした。Jaccard 係数が大きな語と変数ほど太い線で結び、図中で出現頻度の高かった語ほど大きな円で示した。なお、分析に先立ち、出現頻度は高いものの、単独では意味をなさない「する」「ある」「なる」といった語を除外した。

3. 結果

3. 1. 分析対象者

北村・鈴木（1986）では、社会的望ましき尺度の得点が 9 点以上の者は、社会的に望ましい反応をする傾向が高いと考えられており、分析から除外するといった措置も適当であると指摘されている。ただし、本研究では、社会的望ましき尺度の得点が 9 点以上の者はおらず、参加者全員を分析対象とした。

3. 2. 健聴者が考える軽度難聴者が抱える困難の程度

音声刺激の軽度難聴者が日常生活においてどの程度困難を抱えていると思うか、すなわち困難度を尋ねた質問に対して、どの選択肢を選んだ参加者が多かったのかを調べたところ有意であった ($\chi^2(3)=29.80, p<.01$)。多重比較の結果 (Fig. 1)、あまりないと回答した人数 (23 名) は、全くないと回答した人数 (12 名) と同程度であり、非常にある、少しあると回答した人数 (順に、0 名、5 名) よりも有意に多かった (順に $p<.001, p<.005$)。全くないと回答した人数は、少しあると回答した人数と同程度であり、非常にあると回答した人数よりも有意に多かった ($p<.005$)。少しあると回答した人数と非常にあると回答した人数に有意差は見られなかった。

以上より、参加者の多くが、音声刺激の軽度難聴者は日常生活において困難を抱えていないと認識する傾向があった。

3. 3. 学習経験、接触経験、視点取得の関係

学習経験、接触経験、視点取得の各要因と困難度との関係を調べる前に、上記 3 要因間を確認

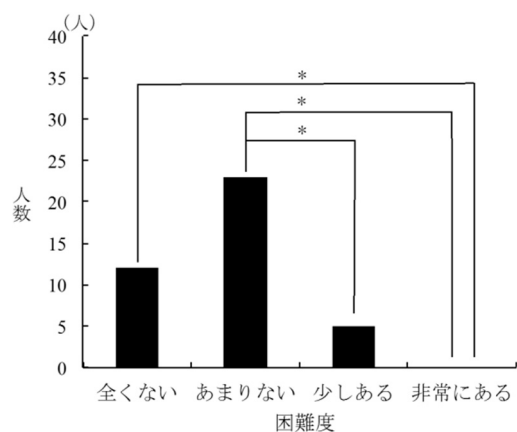


Fig. 1 健聴者が考える軽度難聴者が抱える困難の程度
* $p < .05$

した。その結果、3 要因の間にはそれぞれ有意な相関関係は見られなかった（学習経験と接触経験： $r=-.12$, $n.s.$ ；学習経験と視点取得： $r=.22$, $n.s.$ ；接触経験と視点取得： $r=.00$, $n.s.$ ）。すなわち、健聴者の学習経験、接触経験、視点取得が相互に影響する可能性は低いことが示された。

3. 4. 学習経験の有無による困難度の比較

学習経験あり群は 13 名、なし群は 27 名であった。健聴者の学習経験の有無により、彼らが考える困難度に差が見られるのかどうかを調べたところ有意であり（ $t(38) = -2.40$, $p < .05$ ）、学習経験がない人ほど、音声刺激の軽度難聴者が抱える困難の程度を低く評定した（Fig. 2）。

3. 5. 接触経験の有無による困難度の比較

接触経験あり群は 25 名、なし群は 15 名であった。接触経験の有無によって困難度が異なるのかどうかを検証した。その結果、有意差は見られなかった（ $t(38) = .32$, $n.s.$ ）。

3. 6. 視点取得の高低による困難度の比較

視点取得の得点（ $Mean=19.60$, $SD=2.95$, $Max=27.00$, $Min=14.00$ ）が、中央値 19.50 よりも高かった者を視点取得高群、低かった者を低群に分けた。両群ともに 20 名であった。健聴者の視点取得の高低によって、困難度に差があるのかどうかを調べたところ有意であり（ $t(38) =$, $p < .05$ ）、視点取得低群の方が、高群よりも軽度難聴者が困難度を抱えていないと考えた（Fig. 3）。

3. 7. 健聴者が思い浮かべた軽度難聴者が抱える困難の特徴

以上の分析で、健聴者が考える困難度に関係があることが示された学習経験および視点取得について、困難度との関係性を明らかにするため、軽度難聴者の困難に関する自由記述の分析を行った。なお、自由記述に対して、未回答の健聴者はいなかった。難聴・難聴者に関する学習経験がある/ない者、視点取得が高い/低い者の間で、軽度難聴者が抱える困難として思い浮かべた内容に違いがあるのかどうかを調べた。その結果、形態素解析によって抽出された 374 語の異なり語のうち 58 語がネットワーク図に示された（学習経験の有無：Fig. 4、視点取得の高低：Fig. 5）。以下では、各ネットワーク図とテキストデータをもとに、学習経験の有無、視点取得の高低それぞれの特徴について、図示された語を [] 内に示しながら整理した。

3. 7. 1. 学習経験の有無

学習経験あり群と学習経験なし群に共通してあげられた語（Fig. 4 中央）は、[会話] で [相手] に [聞き返す] などの音声コミュニケーション上の困難に関する語、[後ろ] から来る [車] の [音] が [聞こえ] ないなどの危険との遭遇に関する語であった。

学習経験あり群（Fig. 4 右側）では、会話が [成立] しないなどの音声コミュニケーション上の困難に関する語、[近づく] [自転車] の音が聞こえにくい、[危険] を察知するのが遅くなるなどの危険との遭遇に関する語、さらに [授業] だと聞き返せないなどの具体的な状況下での困難に関する語が示された。

一方、学習経験なし群（Fig. 4 左側）では、[コミュニケーション] が取れない、うまく [聞き取れ]

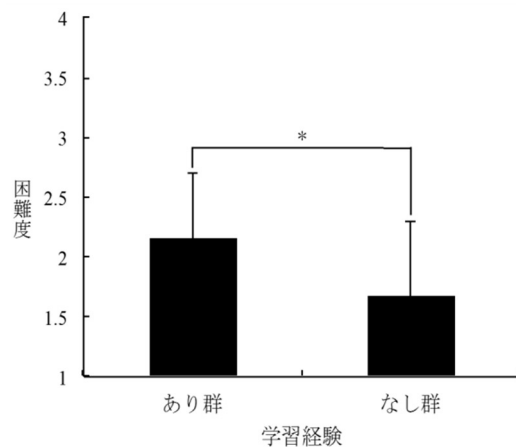


Fig. 2 学習経験の有無による困難度の比較
* $p < .05$, エラーバーは標準偏差を示す

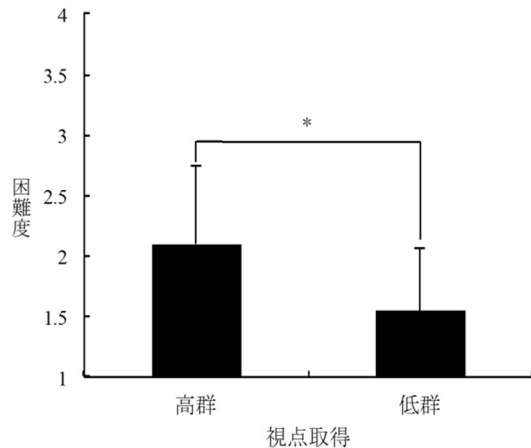


Fig. 3 視点取得の高低による困難度の比較
* $p < .05$, エラーバーは標準偏差を示す

ないなどの音声コミュニケーション上の困難に関する語が示された。難聴・難聴者に関する学習経験がある者は、そうでない者に比べて共起された語が多く、具体的な状況下での困難を示す語が挙げられていた。

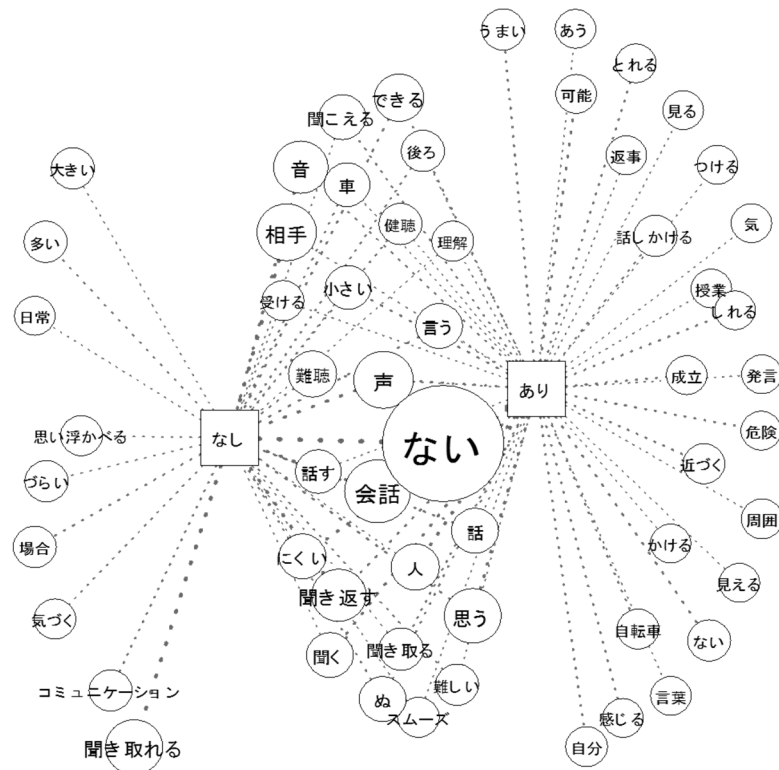


Fig. 4 「学習経験の有無」の共起ネットワーク
 注) 四角で囲まれた「あり」は学習経験あり群, 「なし」は学習経験なし群を指す。両群に共通する「ない」は助動詞, 学習経験あり群の「ない」は形容詞を示す

3. 7. 2. 視点取得の高低 視点取得高群と視点取得低群の両群に共通して挙げられた語 (Fig. 5 中央) は、[会話] が [スムーズ] にかかないなどの音声コミュニケーション上の困難に関するもの、[後ろ] から来る [車] の音が聞こえないなど危険との遭遇に関する語であった。

視点取得高群 (Fig. 5 右側) では、[コミュニケーション] が [成立] しにくいなどの音声コミュニケーション上の困難に関する語、[危険] を察知するのが遅くなるなどの危険との遭遇に関する語、[授業] だと聞き返せないなどの具体的な状況下での困難に関する語、[雑音] が [聞こえる] などの難聴者の聞こえ方に関する語が示された。

一方、視点取得低群 (Fig. 5 左側) では、高群と類似の、[言葉] を [うまく] 発することができないなどの音声コミュニケーション上の困難に関する語が示された。視点取得が高い者は、そうでない者に比べて共起された語が多く、具体的な状況下での困難に関する語や、難聴者の聞こえ方に関する語が挙げられるという特徴があった。

4. 考察

本研究では、円滑な音声コミュニケーションが可能な軽度難聴者が、日常生活での困難を健聴者から見過ごされるという経験に焦点を当て、実証的研究を行った。

はじめに、軽度難聴者であっても、円滑な音声コミュニケーションが可能であることを明示すると、その軽度難聴者が抱える困難が、健聴者から見過ごされる可能性があるのかどうかを検証した。その結

果、健聴者の多くは、本研究で設定したような状況、すなわち軽度難聴者であることは知っているものの、彼らが音声コミュニケーションを滑らかに行っている場面に遭遇すると、その軽度難聴者が日常生活上の困難を抱えていないと考える傾向があると示された。なお、健聴者が、軽度難聴というものが全く分からなかったために困難を抱えていないと判断した可能性も考えられる。しかし、本研究では、軽度難聴者の困難に関する自由記述について、未記入の参加者がいなかったことから、その可能性は低いと推測される。

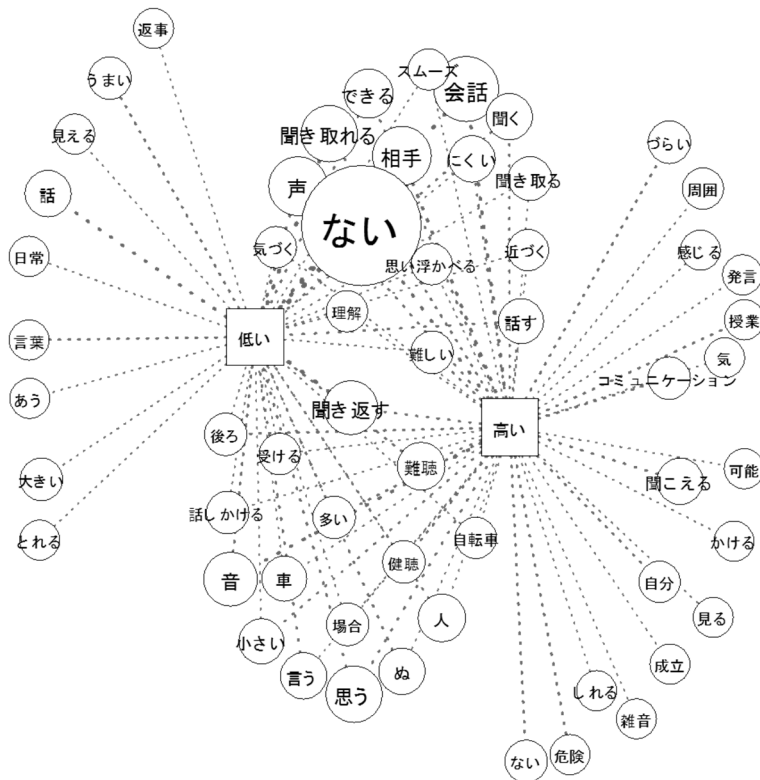


Fig. 5「視点取得の高低」の共起ネットワーク
 注) 四角で囲まれた「高い」は視点取得高群, 「低い」は視点取得低群を指す。両群に共通する「ない」は助動詞, 視点取得高群の「ない」は形容詞を示す

続いて、こうした軽度難聴者が抱える困難に関する健聴者の認識が、健聴者の難聴・難聴者に関する学習経験、難聴者との接触経験、相手の立場に立って考えようとする姿勢（視点取得）によって差異が生じるのか、また、これらの要因によって、思い浮かべられる困難の具体的内容に違いが見られるのかどうかを調べた。

その結果、学習経験と視点取得では認識の差異が示されたものの、接触経験では示されなかった。なお、本研究では視点取得、学習経験、接触経験の間に相関関係が見られなかった。したがって、以下では、差異が示された要因のうち、視点取得と学習経験、それぞれがいかに健聴者の認識に影響を与えるのかについて、分けて考察することとする。

上述したように、健聴者は軽度難聴者が抱える困難の程度を低く見積もる傾向があったものの、学習経験がある者は、そうでない者に比べて、軽度難聴者が困難を抱えていると考えることが示された。この結果は、授業の一環として、健聴児に対して聴覚障害に関する教育を行った西館・澤柿（2011）と一致する結果であった。本研究における学習経験のある参加者が、どのような学習を経験してきたのか、またその学習によって難聴・難聴者についての理解がどの程度なされていたのかは不明であるものの、少なからず理解が深まることで、軽度難聴者が抱える様々な困難に気づくことができたのではないかと考えられる。実際、本研究の中で、学習経験がある者とそうでない者で、軽度難聴者が抱える困難とし

て思い浮かべた具体的記述を比較したところ、前者の特徴として、具体的な状況で生じる困難（例：授業だと聞き返せない）を思い浮かべることが示された。本研究の結果を踏まえると、健聴者が、軽度難聴者が抱える困難を見過ごさないようにするためには、健聴者が難聴・難聴者について学ぶことが有用であると考えられる。特に、学習経験がない者では、具体的な状況下での困難を思い浮かべられていなかったことを考慮すると、軽度難聴者がどのような状況で困難を抱えるのかを重点的に学ぶことが有効であると思われる。

次に、本研究では、視点取得が高い者は、そうでない者よりも軽度難聴者が困難を抱えていると認識することが示された。視点取得が高い者では、軽度難聴者の立場に立って日常生活で起こりえる事柄を想像した結果、軽度難聴者が抱える困難を想定できた可能性がある。このことは、自由記述の結果からも裏付けられる。視点取得が高い者では、軽度難聴者が抱える困難として、具体的な状況下での困難や、軽度難聴者の聞こえ方に関する内容が挙げられていた。軽度難聴者の視点に立つことで、ある場面では軽度難聴者が円滑な音声コミュニケーションを行っていたとしても、そのコミュニケーションを成立させるための努力があることや、別の場面では上手くいかない可能性があることに気がつくことができるのかもしれない。したがって、健聴者の視点取得は、個別の軽度難聴者がどのような場面、状況で困難を抱えているのかを想像する上で重要な要因であると考えられる。今後は、健聴者の視点取得を向上させるための方策について考えていくことが必要である。

その一つとして、難聴の模擬体験が挙げられる。鈴木(2014)では、難聴・難聴者について漠然とした想像しかできなかった健聴の高校生が、難聴を疑似体験することによって、難聴者が抱える困難を実感することができたと報告されている。例えば、健聴の高校生らが「周りの状況から判断したり、キーワードを読み取ろうとしたりするが、本当に正しいのだろうかという不安は尽きない」と実感したとまとめられていた。上述したように、難聴・難聴者に関する学習機会を設けることに加えて、模擬体験の機会を設けることで、より難聴者が抱える困難への理解が深まると考えられる。

なお、本研究では、難聴者と接触した経験がある者とそうでない者の間で、軽度難聴者が抱える困難に関する認識に差が見られなかった。この結果の解釈として、以下の3点が考えられる。1点目は、接触経験があるだけでなく、接触の頻度や質が重要である可能性が挙げられる。山口（2007）が調査の対象とした要約筆記者は、難聴者と接触する頻度が高く、難聴者と深い交流を持っていたと推測される。そのような経験が、難聴・難聴者が抱える困難の想像や具体性に結びついているのかもしれない。今回、難聴者と接触した経験があると回答した健聴者は、接触経験があったものの、その頻度が低く、またその質も十分でなかったために、軽度難聴者が抱える困難を見過ごしたのではないかと推測される。2点目は、接触経験があると回答した者の中には、高度、重度の難聴者と接した経験者が含まれる可能性がある。自身が接した経験がある難聴者と比較すると、本研究の軽度難聴者は困難を抱えていないと考えたのかもしれない。3点目は、接触経験がないと回答した参加者の中には、難聴・難聴者に関する知識が少ないために、実際には難聴者と接触していたとしても、そのことに気づかなかった者も含まれていた可能性が考えられる。本研究では、難聴者と接触した経験の有無のみを尋ね、その頻度や関係性の程度については尋ねていなかった。今後、より詳細な接触経験について尋ね、接触経験と軽度難聴者が抱える困難に関する健聴者の認識との関係についてさらに検討することが必要であると思われる。

本研究では、実際の難聴者による会話ではなく、健聴者の会話を音声刺激として提示した。したがって、本研究の健聴者は、音声刺激の軽度難聴者を難聴者と認識せず、その結果、音声刺激の軽度難聴者の困難を低く見積もったのかもしれない。しかしながら、音声刺激の軽度難聴者が抱える困難に関する自由記述の結果では、全ての健聴者が困難の具体的内容を記述していた。すなわち、本研究での健聴者は、音声刺激の軽度難聴者を難聴者として認識し、軽度難聴者が抱える困難を思い浮かべていながらも、

音声刺激の軽度難聴者が日常生活において困難を全く抱えていない、もしくはあまり抱えていないと判断していたといえる。この矛盾ともとれる結果は、健聴者が、難聴者間での相対的比較、すなわち重度・高度の難聴者と比較すれば、音声刺激の軽度難聴者は日常生活において困難を抱えていないと考えたためなのかもしれない。すなわち、健聴者にとって、難聴者の音声コミュニケーションの巧拙が、難聴者が抱える困難を推測する上で重要な指針であり、これに問題がなければ、その他の困難を囚らずも黙殺してしまう可能性が考えられる。実際には、円滑な音声コミュニケーションが可能な軽度難聴者であったとしても、日常生活の様々な場面で困難を抱えていると考えられるものの(勝谷,2014; 鈴木ら,2002)、厳密を期すのであれば、本研究と同様の質問項目によって、軽度難聴者自身が日常生活を送る上でどのくらい困難を抱えているのかを軽度難聴者を対象に調べる必要があるだろう。その上で、軽度難聴者の実際値と健聴者の推測値を比較し、軽度難聴者が抱える困難が健聴者から見過ごされるのかどうかを明らかにすべきであると思われる。

本研究は、軽度難聴者が抱える困難が健聴者から見過ごされうること、そして、こうした健聴者の認識が彼らの難聴・難聴者に関する学習経験、相手の立場に立って考えようとする姿勢と関係することを示した。従来、難聴者の経験に基づき、難聴者が抱える困難が健聴者から見過ごされているのではないかと、という指摘はなされてきたものの(山口,2003)、この問題が研究の俎上にのせられることはなかった。また、難聴研究に限らず、これまでの障害に関する研究では、障害が相対的に重い者への偏見や差別の問題が取り上げられることが多かったように思われる。

その一方で、障害が相対的に軽い者が抱える問題についてはあまり注目されてこなかった(田垣,2006)。本研究は、難聴の程度が相対的に軽い軽度難聴者にとって重要な問題、すなわち軽度難聴者にとっての障害が健聴者にとって障害と認識されない問題に心理学の立場から着手した点で評価できるものと思われる。本研究では、軽度難聴者が健聴者と同様に円滑な音声コミュニケーションが可能であることによって、健聴者による不理解が引き起こされる可能性が示された。難聴・難聴者に関する教育や合理的配慮を検討する際には、障害の多様性に言及することが必要であろう。例えば、音声コミュニケーションがたとえ上手くいっている難聴者であったとしても、日常生活の様々な場面で困難を抱えうる可能性に言及するなど考えられる。障害の多様性について広く普及させる効果的な教育法を、今後さらに検討していくべきである。本研究を端緒として、軽度難聴者の問題に関する研究がさらに進められていくことが期待される。

注

- 1) 本研究は JSPS 科研費 26380950 の助成を受けたものです。
- 2) 鈴木ら(2002)は、聴力レベルが 50dBHL 未満の者を軽度難聴者と分類し、調査を行っている。ただし、世界保健機構(WHO)の基準では、聴力レベル 40dBHL/41dBHL が軽度難聴と中等度難聴の境界と定義されている。したがって、彼女らが分類した軽度難聴者の中には、WHO の定義する中等度難聴者も含まれる。

引用文献

- 安野友博・芝野忠夫・井村晴美・伊藤治夫(1965). 難聴児の言語発達. 耳鼻咽喉科臨床, 58, 344-347.
- Crowne, D. P. & Marlow, D. (1960). A new scale of social desirability independent of psychopathology. *Journal of Consulting Psychology*, 24, 349-354.
- Davis, M. H. (1983). Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 113-126.
- 樋口耕一(2004). テキスト型データの計量的分析 —2つのアプローチの峻別と統合—. *理論と方法*, 19, 101-115.

- 梶山妙子・河崎佳子 (2008). 軽・中等度難聴者の心理. 村瀬嘉代子・河崎佳子 (編著), 聴覚障害者の心理臨床. 日本評論社, 141-160.
- 勝谷紀子 (2011). 難聴のしろうと理論. 日本大学文理学部人文科学研究研究所研究紀要, 81, 123-130.
- 勝谷紀子 (2014). 日本の難聴者におけるストレスと精神的健康の実態—難聴・難聴者への理解を深めるために—. 日本心理学会第78回大会発表論文集, 446.
- 北村俊則・鈴木忠治 (1986). 日本語版 Social Desirability Scale について. 社会精神医学, 9, 173-180.
- 久原恵理子・宮寺貴之・藤原佑貴・小林寿一 (2016). 非行少年の指導に対して教師が抱くイメージの特徴について—態度や共感性との関連から—. 犯罪心理学研究, 53, 43-57.
- 厚生労働省 (2013). 平成23年生活のしづらさなどに関する調査 (全国在宅障害児・者等実態調査). 厚生労働省, 2013年6月28日, http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/seikatsu_chousa.html (2017年1月10日閲覧).
- 松本裕治 (2000). 形態素解析システム「茶釜」. 情報処理, 41, 1208-1214.
- 中島園美 (2013). 喘息患者の自己管理不良に影響を及ぼす情動認知—アレキシサイミアと共感性からの検討—. カウンセリング研究, 46, 73-82.
- 一般社団法人日本補聴器工業会 (2016). 国内の現状と取り組み. 一般社団法人日本補聴器工業会, 2016年2月24日, <http://www.hochouki.com/about/report/program.html> (2017年2月20日閲覧)
- 西館有紗・澤柿教淳 (2011). 聴覚障害理解を目的とした授業の実践. 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究, 5, 51-60.
- 桜井茂男 (1988). 大学生における共感と援助行動の関係. 奈良教育大学紀要, 37, 149-154.
- 杉内智子・佐藤紀代子・浅野公子・杉尾雄一郎・寺島啓子・洲崎春海 (2001). 軽度・中等度難聴児30症例の言語発達とその問題. 日本耳鼻咽喉科学会会報, 104, 126-1134.
- 鈴木恵子・原由紀・岡本牧人 (2002). 難聴者による聴覚障害の自己評価—「きこえについての質問紙」の解析—. *Audiology Japan*, 45, 704-715.
- 鈴木牧子 (2014). 聴覚障害生徒を対象とした「難聴模擬体験プログラム」の実践—生徒の障害認識にかかわって—. 筑波大学特別支援教育研究, 8, 46-59.
- 田垣正晋 (2006). 軽度障害というどっちつかずのつらさ. 田垣正晋 (編著), 障害・病いと「ふつう」のはざま—軽度障害者, どっちつかずのジレンマを語る. 明石書店, 51-72.
- 田村紋女・杉浦義典 (2017). サイコパシーが向社会的行動と身体的攻撃に与える影響—情動的・認知的共感性による媒介効果. *パーソナリティ研究*, 26, 38-48.
- 山口利勝 (2003). 中途失聴者と難聴者の世界—見かけは健常者, 気づかれない障害者. 一橋出版.
- 山口利勝 (2007). 中途失聴者と難聴者に対する援助行動と関連する要因の研究. *社会福祉学*, 48, 55-67.